

越前大野

北陸線特急「しらさぎ12号」で、敦賀から近江へ抜ける深坂トンネルを出て、余呉湖めがけて染まるような濃い緑の中を走っていた。地図の上での知識ではこのあたりで右に湖西線が分岐して行く筈なのだけれど、駅も無いのにこの山中で複線の線路がどんな具合に分かれるのか興味深々で窓外を見ている。

僅か一時間前、バスで東尋坊から芦原温泉駅まで、熟れた麦畑の中を走っている時にはまさに車軸を洗う豪雨であったのに、南下するにつれて雨脚が弱まり、雲が切れ、湖北へ抜けた今は西方の空には微かにバラ色の夕焼けの気配がある。

浩宮挙式の六月九日、自分の仕事に関係があるとは思わないので休診にするつもりは全くなかったけれど、お目出度だから薬屋さんも検査ラボの会社も軒並みにお休みですよといわれて、私の小さな医院独りグワンバツテモ仕様が無いかと思いついて、突然ながら休診にしてしまった。今年は木曜日に重なる祝日が四回もあると、いつだったか看護婦がこぼしていたのを耳にしてそれも念頭にあった。定期休診の木曜日と重ならなければそれだけ有給の休日が、それも二連休が増えた筈なのというわけである。

浩宮挙式は幸いなことに水曜日で、診療は午前中だけで午後は私独りで往診に廻る日なので実際は半ドンだから、実害の最も少ない日であった。従業員には恩着せがましく水、木曜を連休にすることにして、長らく懸案にしていた越前大野行きを果たそうと思いついた。

大野は知らない町である。ただ旧友Fの出身地でどこかに彼の墓がある筈である。

Fは大学の教養課程で二年間一緒だっただけの縁なのに、妙に懐かしい男だった。秀才面をした連中ばかりの中で独りだけ壘カラで輪郭の太い、一時代遅れて来た様な雰囲気を持っていた。いつも大きな運動靴の踵を踏み潰して履き、柔道部員みたいにガニ股で学内をのし歩いていた。いつだったか学生寮に遊びに行ったらバケツを用意しているところで、「オウ、好いところに来た。これから赤犬を殺して煮て食べるところだ」などと真顔で誘われて辟易した。犬はバケツで溺死させるのだそうだ。彼から見れば私などもエエ恰好シイの坊ちゃんだっただろうと思うけれど、いつも気持ちよく付き合ってくれた。最後に逢ったのは卒業して十年ぐらいの頃、岡山で外科学会があった時だった。大阪の豊中で開業する準備中だとかで意気軒昂だった。

その年の暮れか翌年か、私も知らなかったが、誰にも理由を明かさないうで彼は縊死した。

彼の死後たいぶ経ってから彼の自殺を伝えてくれた同門の友人は、家庭の内情は何も知らぬが仕事のことでは何も問題はなかった筈なのにと不思議がった。開業準備で交渉ごと

を進めている最中だったらしいが、別に大きな困難があったとも聞いてないし、第一あのFさんがそれくらいのことですぬなんて考えられないよなあ。

以来、彼の故郷の越前大野という町、街中を綺麗な湧き水が流れ、朝霧の中で毎日市立つ山あいの町を一度は訪ねて見たいと思っていた。ご遺族を驚かせるのは本意で無いので彼の生家を探すことはしなかったから、旅館の女主人が心当たりの寺を紹介してくれたけれど、Fの墓は結局判らずに終わった。でも、それはどちらでも良い。彼の生まれ育った町を見たかっただけだから。

分岐点は判らなかつたが、いつにまにか余呉の湖の水面の向うに新しい線路が一直線に走っている。

(五時通信 第二一二号 一九九三年七月十日)